Names　Less

コーユー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｎａｍｅｓ　Ｌｅｓｓ

【Ｎコード】

Ｎ６００８Ａ

【作者名】

コーユー

【あらすじ】

２００９年人との関わりを絶っていた青年達はとある繋がりをきっかけに仲間を持ち、自分の力に気づいていく。

青い夏～初めまして見知らぬ友達（前書き）

自分の書いている小説に「ＳＯＵＬＥＡＴＥＲ」というものがあります。
それの数年後のお話です。
とくに過去作品を読む必要もありません。
一応知識程度ってことで。

青い夏～初めまして見知らぬ友達

夏の暑いある日。
黒い服を着た集団がひとつの石の前に佇んでいた。
全身を目の前の・・・・・いや、周囲に同じように佇む長方形の石に合わせたような真っ黒な服装。
普段の生活では早々見ることの無い光景。
いや、職業によっては飽きるほど見る光景だろう。
あるものは、ハンカチで目元をぬぐい、あるものは呆然と石を見つめる。
またあるものは何かを堪える様に空を仰ぐ。
その空は、青かった。
底なしに青かった。
夏の日にふさわしく清清しいほど突き抜けるような青さで彼らを見下ろしていた。

カッカッカッ…
場に似つかわしくない単調に、しかし軽快に鳴らされるリズム。
最初は小さくそして徐々に大きくなるベースの音。
流れるように刻まれる歌うようなキーボードの音。
存在感を出しながらも、全体を支えるドラムの音。
ばらばらに各々の楽器を演奏する青年たちは、何かを待つように一心不乱に各々の楽器を奏でる。
「初めまして…こうして皆さんの前に出るのは初めてですね…」
澄んだような女性の声。
それは、長方形の黒い石の上におかれたラジカセから流れる電子音。
三人の楽器の音の中でもしっかりと聞こえる。
その声を聞き、さらに嗚咽を堪える人々。
それでも三人は演奏を止めない。

「じゃぁ、聞いてください！最初の曲は、私たちの名前を取った…」
そこで、三人楽器は始めてひとつの音を出した。

空は青く、吸い込まれるように彼らの音楽は空へと向かって奏でられる。

―Ｎａｍｅｓ　ｌｅｓｓ―

４月某日
東京都渋谷駅。
銀色に黄緑色のラインを引かれた山手線は、相変わらず大量の人々を運ぶ。
押し合いへしあい各々の目的地までどうにか自分の陣地を守りながら進む。
「渋谷～渋谷～」
間延びした男性の声と共に開いたドアからまさしく「ドッ」という感じで流れ出す。
「毎回思うが、この人はどうにかならんのか」
黒縁の眼鏡をかけた男性がハンカチで汗をぬぐいながらぼやく。
「さすが、東京って感じだよねぇ…」
その横にいた青年が少し疲れたような声で返事をする。
「クソっ何度も足を踏みやがってあんのオヤジ！」
こちらは怒り心頭！といった感じで髪の毛を金髪に染め上げた男が声を荒げる。
そんな三人を気にも留めず人々は川の流れに身を任せるように、せわしなく歩んでいく。
「なんか、忙しないねぇ…」
その流れを見ていた青年はボソリとつぶやいた。

「おれ等引きこもりには関係ない罠w」
眼鏡が大げさに肩をすくませるジェスチャーをする。
「それはお前だけだ。」
即座に金髪が反論する。
立ち止まっていた三人もいつしか回りの流れに乗って、改札口を出た。
アナウンスに負けないぐらい大きな騒音に閉口しながら歩いたのは言うまでも無い。

渋谷駅
ハチ公前
「で、ユイはまだ来てないのか。」
金髪は少し苛立った口調でタバコを咥えながら青年に聞く。
「まだみたいだね。バスが少し遅れてるみたいだ」
そんな金髪に臆することなく青年は携帯電話で時刻を確認しながら返答する。
「もう少しのんびりできないのか、田舎モノw」
黒縁眼鏡のおちょくるような口調にピクリと金髪の血管が浮き出す。
「このッ…！」「まぁまぁまぁ！人が多いしおとなしくしててくれ…」
今にも飛びかかる勢いの金髪を諌めながら周りを見渡す。
平日にもかかわらず、忠犬の周りに集まっている人、人、人…
スーツ姿の人もいれば、普段着姿の人、はたまた高校だか中学校の制服を着たままの人。
または、それ以上に存在感を放っている数こそ少ないがメイドのような服を着た人ナドナド。
うんざりしそうな人の海を眺めていると、ふと青年の携帯電話が着信を告げた。
「ん…ユイからだ」

左耳に携帯電話を当て、右手で反対の耳をふさぐ。
「もしもし…」
金髪と眼鏡の二人はその様子をじっと見詰めている。
青年は、ゆっくりと向きを３６０度動かしながら会話をしている。
どうやら「ユイ」という人物は近くにいるようだ。
「―ッえ？だから、忠犬ハチ公の前…」
「だから、忠犬の前に私もいるってば！」
「いや、だからどこに…」
気が付けば携帯電話を使いながら目の前で話をしている男女が二人。
「あ…」
「え…」
「アホだな」「バカかとw」
顔を赤くする二人に対し、様子を見て笑う二人。
「初めましてだね。ギターパートやってたカズキです」
「ドラムを叩いてたテツヤだ」
「キーボード弾いてたタイル」
三人が各々勝手に自己紹介をし、遅れて女性が自己紹介をした。
「初めまして。歌詞を書いてたユイです。よろしく」
少し茶の入ったショートカットの髪の毛が高く上った太陽の光を浴びていた。
『よろしく』
男三人は予期せず声を合わせてそう言った。

四月某日
暖かい日差しどころか、少し暑くさえ感じるこの。
日遠くて近くにいた四人は初めて出会った。

篭の中の鳥

とある病院の一室。
清潔感に溢れる部屋に横になる少女が一人。
窓は締め切られ、高く昇った太陽は風が通り抜けられない窓を付きぬけて部屋を明るく照らす。
少女はじっと窓の外を眺めている。
ヘッドフォンからは軽快な音楽が流れている。
それにあわせてぼそぼそを口ずさむ少女。
あまりにも小さい声のため本人すら聞き取れていないが、歌の内容は自由を渇望するあまり鳥かごから逃げ出す…
そんな歌であった。

コン、コン、コン
「はい…」
窓からゆっくりと視線を部屋と同じく真っ白なドアに向ける。
ドアノブが動きゆっくりと開かれ、これまた真っ白な服に身を包んだ看護士が部屋に入ってくる。
「はーい、検温の時間ですよー」
間延びした声の看護士は「どこか調子の悪いところはありますかー？」と聞きながらなにやら持ってきたボードに記入をしつつ体温計を目の前に差し出す。
「いえ、特に変わったところはないです」
少女は無表情で体温計を受け取る。
「じゃぁ、いつもどおり何かあったら呼んでくださいねー」
「はい…」
いつもどうりの会話。
少女と看護士は何度も、何日も、何週間もこのやり取りを繰り返している。

お互い飽きること無く…と、言うよりも仕事で行っているのと、聞かれるから答えている、タダそれだけ。
体温計をわきの下に挟み、少女は再び横になる。
窓ではなく天井を見上げて。
ヘッドフォンからは少女のよく知る歌が流れていた。
顔の知らない名前も知らない５人組の名前も無いグループの作った曲。
少女はうつ向いた。
その曲は素晴らしい出来だった。
それこそ今市場を賑わせている歌手に負けないぐらい。
だからこそ、悔しかった。
インターネット掲示板の書き込みでしかしらないが、彼等は皆近い年代らしい。
ここから動けない自分とは違ってなんと輝かしくみえることか。
少女は天井を見つめながら一筋涙を落とした。

体温計が計測終了を伝える音を無感動に伝える。

灰色の春

五月一日。
「あー…」
目の前には焦げ茶色の木目。
徐々に頭の中の眠気という名の霞が晴れていく。
遠慮なく大きなあくびをしてのそりと体を起こす。
「んー…」
恐ろしいまでの倦怠感。
体は栄養を早くよこせと催促の音を鳴らせる。
ぐぅぅぅぅぅぅぅぅ…きゅるるるる…
芸術性のかけらもない音が部屋に鳴り響く。
「そんなに催促されてもなぁ」
腹に手を当ててみるがそんなことで、空腹が収まるはずがなくより一層腹は喧しく騒ぎ出す。
ぐるるるるるるるるる…きゅるるるるるるるる…ぐごごごごごごごごごご…
明らかにおかしな音が一人だけの部屋に響く。
早くよこせ、今日一日の活動のエネルギーを早くよこせ。
そう催促するのはわかる。
分かるのだが…
「だりぃ…」
そのエネルギーを摂取するために使うためのエネルギーを使うことすら面倒クサイ。
自炊しようなんてもってのほか。
もっぱらコンビニ弁当ですませている。
「腹、減ったたな…」
重い体を起こして俺はのろのろと服を着る。
腹が減ってはなんとやら。だ。

ついでに習慣になっている立ち読みでもしてくるとしますかね。
ふと、部屋の真ん中においてある炬燵（春夏秋冬いつでも出してある）の上においてあるノートパソコンに目がいった。
この部屋の俺の財産の中で一番高価な物
ちなみに二番目はＰＳ２。

パソコンの中は俺の趣味のデータが所狭しと詰め込まれている。
あ、だからって、エロ画像とかじゃないぞ？
いや、少しは入ってますが…。
えぇ、そりゃ健全な男子学生ですから。
「…、心の中で誰に言い訳してるんだ。」
気まずく、一人つぶやく。
そう、俺の身分は世間一般には「学生」
実際は、両親の仕送りで生活していて、大学も休みがちなただの穀潰しである。
アルバイトはやっていない。
趣味は音楽とパソコン。
日がな一日インターネットや、ゲーム、音楽を作って遊んでいる。
「ふぅ…」
なんか、へこんだ。
自分で自分の状況を整理してへこむことも最近は多くなってきている。
それだけ危機感を持っているのだろう。
それでも、楽な生活が染みついた体はまともに勉学に励もうとする心をいともたやすく懐柔してしまう。
「いつまでもあると思うな親と金…か」
両親に昔聞いた言葉だ。
明日からまじめに学校に行こう。
そう思ってずるずる過ごしてしまった。
♪～！！♪♪！！

独特の音が部屋にこだまする。
携帯電話の着信音だ。
「はい。…ん？あぁ、大丈夫、大丈夫」
両親から。
「学校？ちゃんと行ってるって」
嘘。
「何とかなってるって。平気平気」
嘘嘘。
「ん。友達だっているし、大丈夫一人暮らしも何とかやってるから」
嘘嘘嘘。
「心配性なんだって。何なら様子でも見に来る？俺はいつ来られてもいいけど」
嘘嘘嘘嘘。こられては困るのに来ないことを知っているからこそつける嘘。
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘。。。。。。。。。
「ん。分かった何かあったら電話するから。それじゃ」
さよならと同時に心の中で「ごめんなさい」と謝る。
嘘をついていることに大してなのか。
こんな生活をしていることについての謝罪なのか。
それすらも分からないが、ただ、謝るのが癖になっていた。

「さてと、飯でも買いに行きますかね」
上着を羽織り、寒いのか暑いのかよく分からない5月特有の微妙な朝の世界に身を投じる。
考えてたって仕方がない。いつかこんな生活をぶち壊してくれる何かが起きるさ。
そう心に願い俺はいつものコンビニへと足を運んでいく。

一週間前顔も名前も知らない仲間たちと一昼夜を共にして作った名もない歌を口ずさみながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6008a/

Names　Less

2010年10月17日03時34分発行